

# よか ネット

YOKANET

No.70 2004. 7  
 (株)よかネット

## NETWORK

- 人もうけ通信21 18世紀の人もうけの原点、北海道から鹿児島まで  
 40年にわたって旅と造仏を続けた木喰上人  
 ——山梨県下部の丸畑の生家をたずねる—— ..... 2
- ひとこと・ひと味、笑顔で交流の輪が広がりました  
 第12回「よかネットパーティー」報告 ..... 6
- 史跡・遺跡系に対する認知度、体験度が低かった  
 ～「九州度の自己採点を集計してみました～」 ..... 8

## 見・聞・食

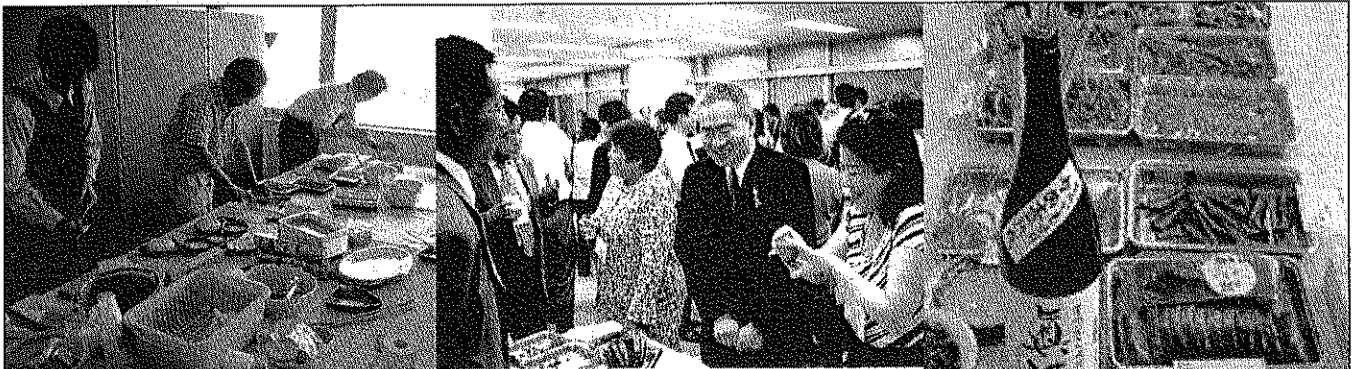
- 屋形船で食べるエツは五つの“あじわい”  
 があるからこそ価値があり、楽しい ..... 10
- 放置自転車を再利用し、まちづくりに活かす  
 ——市川市行徳地区の事例報告—— ..... 12
- 国東半島で寺巡り ..... 14

## 近況

- 唐津街道ウォーキング  
 ～畦町～原町～赤間宿～ ..... 15

## 本・BOOKS

- 今、法曹界がおもしろい ..... 16
- 就職がこわい  
 お菓子を仕事にできる幸福 ..... 17



### ●ひとこと・ひと味、笑顔で交流の輪が広がりました ～第12回よかネットパーティー～

①	②	③
写真コメント		
④	⑤	⑥

- ①所員みんなで慌てて準備。なんとか間に合わせました！
- ②いつのまにかこの人ばかり。交流の輪あちこちで。
- ③テーブルの上には、皆で持ち寄った“ひと味”がずら～り！
- ④手打ち蕎麦は今年も好評！
- ⑤顔なじみのメンバーもにっこり。博多にわかを楽しむ
- ⑥新作がたくさんありました！「博多にわか」



18世紀の人もうけの原点、北海道から鹿児島まで  
40年間にわたって旅と造仏を続けた木喰上人  
——山梨県下部の丸畑の生家をたずねる——

糸乗 貞喜

<木喰上人の生家をたずねて、7代後の当主や近所の人とお会いし、話を聞いた>

木喰仏の特徴は“微笑み”にある。憤怒の様相をするべき十二神将像や不動明王の像でも、どこか“やわらかい微笑み”のような相がある。初期の木喰仏と晩年のそれでは随分違ってきているが、それでもどこか、初期の仏像から微笑みの感じが出ている。

このやさしい微笑仏をつくった人がどんなところに生まれたのか、ずっと気になっていた。木喰仏を見てから25年後の今年、やっと訪ねることができた。

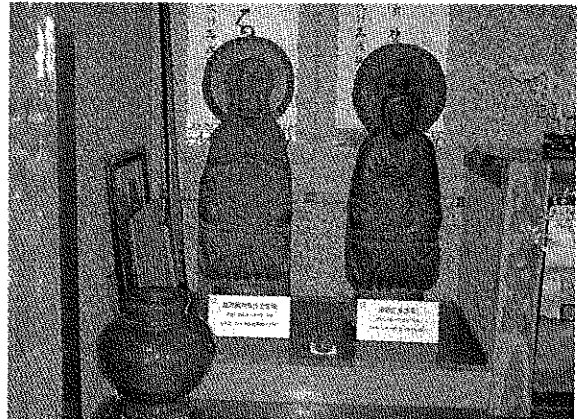
もちろん、生家が現在どうなっているか、子孫の方が居られるのかなど全くわかっていなかったが、インターネットで木喰上人を検索して、「木喰の里微笑館」というのがあり、そこを訪ねた人の記録などを見ることができた。それを目当てに行ったら、何か木喰上人の生誕地のたたずまいぐらいには触れられるのではないかと思って出かけたのである。

下部温泉駅からタクシーで片道4,300円ぐらい乗り、山の上に登っていったら、その斜面地に微笑館が建っていた。ここは展示物は寂しいが、受付の女性は親切で、お茶に梅干しを添えてもてなしていただいた。

この女性に聞いて、微笑館の近くに生家があり（木喰仏もある）、他に岩松家、小林家にも木喰仏があると知り、訪ねてみることにした。生家の伊藤家にはタクシーの運転手に電話してもらって、他の2家は「行ったら見せてもらえますよ」という女性の言葉を信じてトコトコと出かけた。

はじめ行った岩松修行さんは木彫仏をたくさんつくっておられる。木喰仏を手本に永年彫ってきた人である。丸畑と木喰仏のかかわりを30分ぐらい聞いていたと思う。

岩松家のとなりに小林家がある。そこにも木喰仏が残っていた。ここでもおばあさんからしばら



左が柳宗悦の話に出てくる馬頭観音菩薩像。これは名品ということで展示会にもよく出された

く話を聞いた。この家の馬頭観音が展示会に出された話や、この里の話などをポツポツと話していただいた。

「木喰上人生家」、「木喰記念館」という看板のかかった伊藤家では、2時間余りも話を聞いていた。どの家でも、突然やって来たにもかかわらず親切に見せていただいた。伊藤家でもおいしいコンニャクを“酔味噌あえ”でいただいた。上人から7代目の伊藤勇氏の、全国に抜がった話は、ついていくのが大変だったが、面白かった。1階の床の間と2階の記念館にはたくさんの資料があった。生家の近くに四国堂が再建されている。上人が83才のとき丸畑に帰ってきて、地元の人から四国遍路にある88体仏をつくってくれと頼まれ、四国堂を建てその中に88体を安置した。その後、地元の人たちはここに参って信仰することになった。それは1800年頃で、僅か200年前のことである。

この堂は大正12年にはなくなっていた。その10年ぐらい前までは、2月15日には老若男女が木喰堂に詣でて、香をたいていたと伝わっている。

#### <災難に会う木喰仏>

木喰仏は大正12年（1923年）に柳宗悦によって発見されたといわれている。木喰仏は、背面に必ず上人の筆で製作年月日とサインが書かれている。

したがって誰が見ても木喰仏だと分かるわけで、仏像がつくられた200余年前から、木喰仏を納めている寺や御堂では、木喰仏ということはよくわかっていた。しかし、この素朴で荒削りの仏像の評価は、キマリゴトにしたがって造像された形のよい仏像より低かったのである。ところが柳宗悦はこの素朴な中に現れている上人の“思い”こそが“美”であるということを見つけた。このいきさつは「上人発見の縁起に就て」（『民芸40年』岩波文庫。他の文庫本にも入っている）という文章に書かれている。

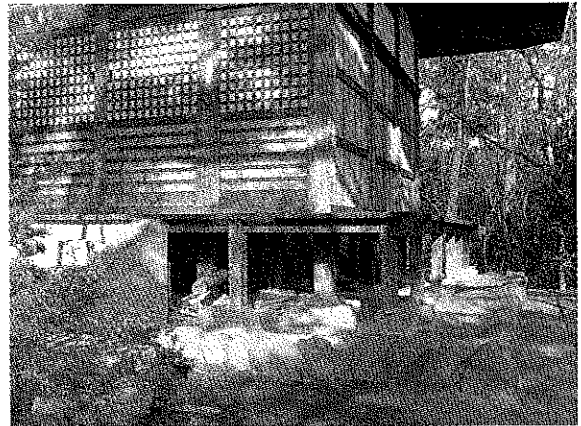
柳宗悦は八ヶ岳や駒ヶ岳への旅のついでに甲州へよって朝鮮の焼物を見ることにしていた。ところが「その日偶然にも二鉢の上人の作が私の目に映ったのです」ということで木喰仏のすばらしさが「発見」されてしまうことになった。柳宗悦は、その時の気持ちを「その口元に漂う微笑は私を限りなく惹きつけました。尋常な作者ではない。異数な宗教的体験がなくば、かかるものは刻み得ない——私の直覚はそう断定せざるを得ませんでした」と述べている。

「その折若し仏鉢に薄い一枚の布が掛かっていたとしたら、一生上人は私から匿されていたかもしれないのです！」と述べている。この話の仏像は地蔵菩薩と無量寿如来で、この持ち主の小宮山氏から「木喰上人」という名前を聞かされている。そして地蔵菩薩を贈られて、風邪の病の床で見続け、木喰上人の研究に入る決心をしたと書いている（この文章は感動的なものです。ぜひお読みください）。

今、丸畑には木喰仏はあまり残っていない。おそらく100体近くあったとされているが、ほとんど持ち出されて分散している。微笑館の展示物も見べきものがあまりないと書いたが、木喰仏がこの丸畑で不幸にあったことと無縁ではない。以下柳宗悦の「木喰五行上人の研究」や、今回この里で私が見聞きしたことと重ねて報告したい。

**<村人の信仰の中心であったが、四国堂の88体の仏像は離散した>**

永年村人の信仰を集めていて、年中行事も行われていた四国堂（村人は木喰堂と呼んでいた）が、突然私有物だと主張され、「村の人々と争った後、ついに僅かばかりの金の為に、凡ての仏像を商人の手に移した」と柳宗悦は述べている。信仰の対



信仰のためにこの木喰堂に集まって、はみ出した人が座ったかもしれない縁石（右下）

象である仏像を失った御堂が「それが只の用材として切房木に持ち去られたのはその一、二年の後であらう。せめて格子天井の一枚をもと思ってたが、今はその行くえを知る由もない。大方薪として役立たせたのであらう」と書いている。しかしこの散逸によって木喰仏が山を降り、小宮山家に置かれることとなり、柳宗悦の眼に飛び込んできたのもある。不幸ではあったが宗悦を通じて世の人々に木喰仏の存在を知らしめたということでもある。

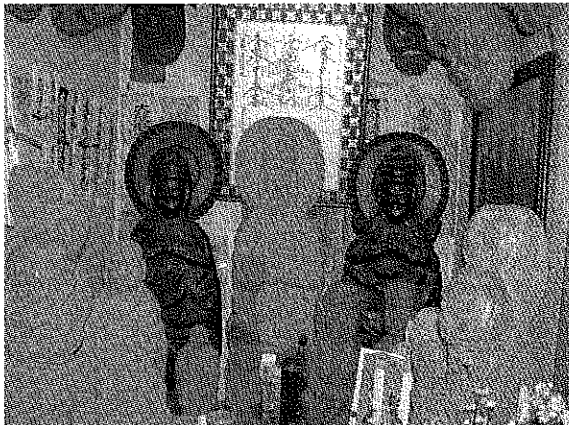
現在再建された四国堂には二体しかない。伊藤勇氏に案内していただいて、四国堂に行った。

「昔の建物はもっと大きかったのですか」と尋ねたら、「同じ大きさで、同じ礎石の上に建っています」といわれた。コンクリートで補強されているが、東石はそのままである。敷地をめぐる石も往時のままと思われた。行事の時、この狭い仏堂に入りきれない人などは、この敷石に腰掛けて話したりしていたに違いない。

残念ながら今の四国堂は信仰の中心ではなく、資料館の一つと考えられている。

**<柳宗悦の発見した馬頭観音像を、今回私も見た>**

私は今回タクシーに乗って上人の生地の丸畑まで楽々に行くことが出来た。それにひきかえ、宗悦が大正13（1924）年6月11日に、一人で下部へ入ったときは、案内の人を頼んで「二里余り常葉川をさかのぼりました。暑い午後の光りに山路を縫って歩む私達は汗にひたりました。私はその日まで丸畑が何村に属するか熟知していなかったのです。もとより血縁の一族が今尚その地に健在かどうか、それらのことについて殆ど凡てのことは知られていませんでした。……そこに上人作の内



岩松さんの家の床の間、黒い二体以外は岩松さん作。これ以外にも数十体の作品があった

仏があると教えられました。突如私の目前にとり出されたものは馬頭観世音の一躰でした。それを眺めたとき、私の呼吸はしばし奪われました」と書いている。木喰仏は一度一体でも熱心に（思いを込めて）見た人は、別の木喰仏を見ても、必ずわかると思う。宗悦は一瞬にして、それが同じ上人の木喰仏であるとわかったのである。なぜかだくだと引用したのかと云うと、今回私が小林さんの家で、おばあさんの話をききながら見せていただいた馬頭観音が、この時（80年前）宗悦が見て感動したものだと思うからでもある。私に見せてくれたおばあさんは、当時生まれていたのかいなかったのか、なんだか遠い昔のことなのか、意外に私たちの世代とつながった情景のことなのか、不思議な気がする。

<世に知られ、値打ちが上げれば災難もふえる>

木喰微笑館を出てははじめに行ったのが、岩松さんの家だったということはすでに述べた。岩松修行さんは現在75～76才だと思うが、「父親は大工だったし、仕事柄道具もあったので、家にあった木喰仏を手本にいたずら（彫刻）していた」と云っておられる。そのたくさんの木像が部屋と仕事場におかれている。

床の間には木喰仏らしき黒光りする2体とその間に岩松さんの作られた仏像がある。「これはどうしたんです」とたずねたら「近所のものが来て、『ちょっと貸してくれ』と行って持って行って売ってしまって満州へ行く旅費にってしまったで…」という話であった。

おそらく柳宗悦の奔走によって木喰仏の声価が高くなり、売って旅費の工面をするというような才覚の対象になりだしていたのだろう。満州とい

うことは、昭和10年代前半ぐらいのことだと思われるが、岩松さんも10代前半だったのだろうし、記憶にも残っているようであった。

<「南無阿弥陀仏国々御宿帖」という全国遍歴の宿帖や納経帖などの日記が残っていた>

柳宗悦は、馬頭観音を見て驚きながら四国堂へ移っていったが、そこは石塔以外残っているものはなかった。何か残っていないかと思って上人の筆になる書類はないかとたずねたら「一人の若い農夫が手に古びた紙片をもたらして、之に書いてある筈だ」と云って私に手渡しました。私は薄明かりの中に紙を近寄せて文字をたどったのです。

『クワンライコノ木喰五行菩薩事ハ』と書き記された文句、それに奥書きの自著花押、それが上人の自筆の稿本であり、且つ自叙伝であるということは疑う余地がないのです。その折の私のうれしさは今も忘れる事が出来ませぬ」と述べている。そこで帰るのをやめて、その夜のうちに「どうしても之のみは筆写して帰らねばならない」と考え、夜が白むまでに写し終わる。

今ならコピー機があるが、柳宗悦は自分で筆写しているのである。むろん上人のカタカナと漢字の納経帖などは余人では解読が大変だったとも考えられる。このあたりの宗悦の文章は、心の躍動そのものを伝えてくれる。その20日ほど後にもう一度ここを訪れ、資料を借用して木喰上人の研究が始まる。

これらの納経帖などをたよりに、上人の足跡をたどると、前後4回にわたる全国遍歴がわかる。

第一期 1773～77年（安永2年～6年）

丸畑を出て東国、男鹿半島、まで巡錫している。

第二期 1777～85年（安永6年～天明5年）

北海道へ行き、佐渡へも渡っている。

第三期 1785～1800年（天明6年～寛政12年）

この旅が一番長く、中部、近畿、中国、四国（遍路は3度回っている）、九州をたどる旅であるが、途中は日向国分寺（宮崎県西都市）で住職として、9年とどまっている。

第四期 1802～10年（享和2年～文化7年、93才）

第三期と四期の間に丸畑で四国88カ所の仏像を刻み、四国堂を建て、開眼供養をして旅立っているが、その年齢は85才だったと云われている。89才の時、丹波の国八木町の清源寺にて16羅漢像を奉納したのである。私をはじめ木喰像に

ふれたのがその羅漢像であった。

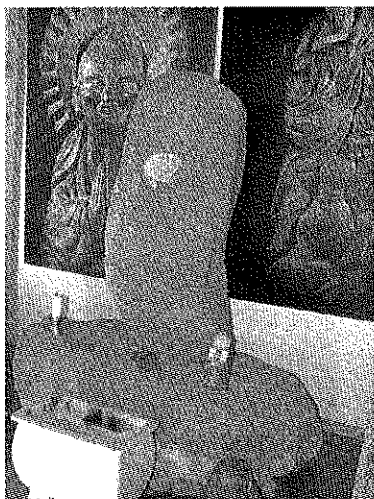
四国堂は失われていたが、柳宗悦はここで見つけた上人の自筆日記を見ることによって、上人巡錫の様子が分かり、その後、木喰仏を全国に訪ね歩く手引きとなった。

<現在の四国堂はどうなっているか>

伊藤勇氏に開けていただいて、再建された四国堂へ入った。宗悦が「只一基の石塔が昔を語って叢の中に捨ててあるばかりでした」といっている石塔が御堂の中にあった。子安観音もあったが、天井を見上げてびっくりした。そこには私をはじめ木喰仏を見た、清源寺の住職によると思われる「羅漢」という墨書があった。それより驚いたのは、パチカン市国法王庁大司教やミラノ教会の“mokujiki”という書まであったことである。木喰仏の微笑みは、国籍や宗教を越えて通じているのである。

木喰上人の略年議を書くと、次のようになる。

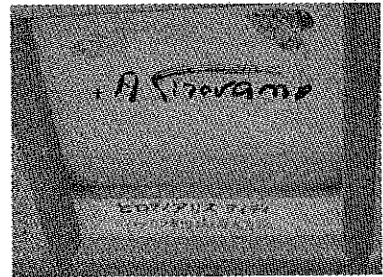
- 1718年 丸畑生まれ
- 1739年 (21才) 出家
- 1762年 (45才) 木喰戒を受ける。
- 1778年 (61才) 第二の旅に出て北海道に渡る、はじめて造仏に取りかかったといわれている。
- 1781年 (74才) 日向国分寺の住職となる。



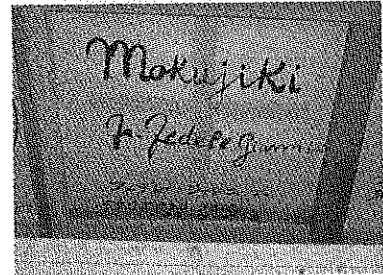
宗悦が叢にあったと書いている石塔



京都丹波八木町の清源寺の住職の書が天井に。私をはじめ木喰仏を見させていただいたときの住職か？



パチカン帝国法王庁大司教ピロウ、アリストティディの書



イタリアカトリック教会ミラノ会長の“mokujiki”の書

- 1800年 (93才) 丸畑に帰り、四国堂で88体仏を完成させる。
- 1806年 (89才) 丹波八木清源寺、陰涼庵に。16羅漢など。
- 1810年 (93才) 甥が笈箱をもって丸畑に帰ったので上記の日記などが残っている。

<私と木喰仏のつながり>

このことについては、10年ほど前に「よかネットNo5」に「不思議なあたたかさをもつ微笑仏」という文章を載せているのでそれをもう一度引用することにした。

【不思議なあたたかさをもつ微笑仏】

私をはじめ木喰仏に出会ったのは昭和50年で、丹波の国八木町の清源寺においてである。そのとき不思議なあたたかさをもった木喰仏の表情と住職の話は、今でも耳に残っている。「そりゃまあ、棟方志功が木喰上人の仏さまを見るとね、飛びつくようにして抱きついての、涙をポロポロこぼしながら、オイオイ泣いての、これにはびっくりしての」と住職はいつていた。

住職の話によると「柳宗悦さんが、河井寛次郎さんなどと来やはって、この仏さんを見て大変驚き、いろいろ調べて帰らはった」ということであったが、私はその頃は柳宗悦についてはほとんど知らず、棟方志功の話の方に気をとられていた。

木喰上人とは木喰戒を行った人のことで、木喰戒とは真言宗の行の一種で、百日間、五穀を断ち、肉食せず、火によって料理したものを食せず、塩味もとらず、蕎麦粉や木の実などを常食とする修行である。この木喰仏を作られた木喰五行明満仙人は、享保3年(1718)甲斐国の丸畑に生まれ、45才のとき(宝暦12年、1762)「日本廻国修行せんと大願を起して法身すること45歳の年也其節、常陸の国木喰敏海上人の弟子となり、木喰戒を承ぎ、凡40年来の修行なり」と自伝に書いているように、「凡そ日本国々山々嶽々島々」を追って40余年間修行された。61才の年(安永7年、1778)北海



山口県福栄村の  
立木薬師如来像

道にいたときから造仏をはじめられ、千体の造仏の願をかけられた。清源寺ではじめて見た木喰仏の一番大きい釈迦如来が千体目の彫像であった。

私が今まで見た木喰仏は60体ぐらいであるが、200年前に彫像された千体余りのうち、現在600体ぐらいが確認されている。

木喰上人が全国を遍歴された中で最も長く逗留されたのが日向の国分寺であり、ここには木喰仏の中で最も大きい(261~315cm)大日如来などが5体残っている。この地方は明治期の廃仏棄釈が強かったところで、寺は焼かれてしまっているが、木喰仏は近くの民家に避難させられて無事だった。したがって今も、大日如来の頭がつかえそうな小さな御堂に収蔵されている。

山口県の木喰仏も多い。木喰上人の足跡は、木喰行という、およそ都会では行えないような行を続けたために、人口の少ない僻かなところに多い。また地元でもそれほど有名というわけではないので、一応住所の書かれたリストを持っていても、たどりつくのが大変である。その上、無住寺だったり、極めて大切にしてお祀りに納めて厳重に鍵をかけていたり、扱いの落差がはげしい。山口県のある寺では、無住寺で鍵を保管している家わからず、見るのをあきらめかけていたのだが、迷い迷ったすえ寺だけは見つけ「一応場所はわかったぞ」と自分に言いきかせて、それでもと思って本堂の戸に手をかけてみると、不思議にもスルリと動いた。兎にも角にも合掌して中に入らせていただき、拝観し、写真を撮らせていただいた。願行寺の立木薬師如来像も誰もいない静かな境内にある。

丹波の八木町から南西へ進むと、能勢(大阪府)を通過して猪名川町(兵庫県)へ出る。ここにも立木仏がある。東光寺の立木子安観音は明治初年に落雷によって枯れたので、境内の堂に納められている。他に、本堂には閻魔十王など10体の木喰仏がある。また猪名川町には他にも毘沙門堂などに多数残っている。

最も多く残っているのは新潟県である。生誕地の山梨県の丸畑にも多数残っていたのだが、大正末に柳宗悦によって世に出た頃から売られ、今は全国に広がっている。そのうちの一部が東京駒場の日本民藝館にある。私は民藝館のものしか見えていない。木喰上人の日本全国にわたる行脚の足跡は、柳宗悦の精力的な働きで、凡そ裏づけられている。その道筋はいずれも辺地であって、温泉好きであったことから湯治場に寄るこ

とはあっても、都市に逗留している形跡はない。考えてみると、木喰戒を続けるためには田舎をめぐるしかなく、ほとんど自然を相手の遍歴であった。木喰仏のやさしさは自然との交わりの中で身についた謙虚な日々から出たもので、力強さは「躬の長六尺」で一晩に2体も刻む頑健な身体からきたものであろう。

また回国巡礼に歩み出されたのが45才の時であり、彫像を始められたのが61才、90才で千体仏を成就し、93才まで回国を続けられたのであるから、年令を重ねられた力強さであったと思われる。すでに私は上人の回国を始められた年令を過ぎているが、彫像を始められたときの年にはなっていない。ともすると体力の衰えを気にしはじめるわれわれを、はげましていただいているようである。

(追記; 私は2004年の現在、600余体ほど発見されている中の300体弱を見ている。もちろん展覧会などでかせいだものを含めてではある。)

(いとりのり さだよし)

ひとこと・ひと味、笑顔で  
交流の輪が広がりました  
第12回よかネットパーティー

雪丸久徳、原啓介

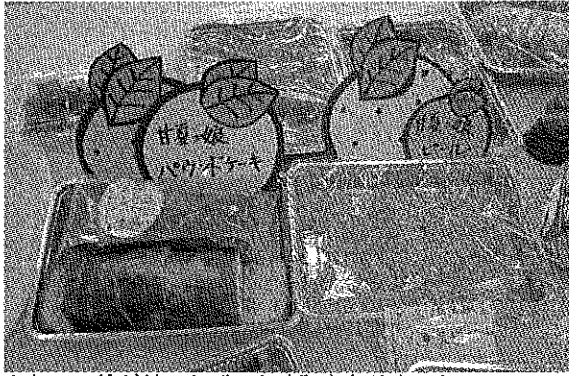
●今年も、2日にわたっての開催

今年も、ひとこと・ひと味をもちより、人と人との交流の輪を広げる「第12回よかネットパーティー」を開催しました。

今年も、6月中旬に事務所が移転するというこで、新事務所のお披露目を兼ねて、例年、土曜日の午後に行っていたのを6月4日(金)、5日(土)の2日にわたって開催しました。初めての会場ということで、賞味期限の短い料理は到着日を2日にわけて取り寄せたり、レイアウト決めに時間がかかるなど、事前の準備にとってもこずりました。パーティー1日目は、朝の準備もかなり遅れ、一時間くらい前になっても、料理の盛り付けができず、お客さんがぼちぼち入り始めた頃から、所員総出で一気に盛りつけにかかるほどの慌て様で、先行き不安なスタートでした。

●交流の輪、あちこちで

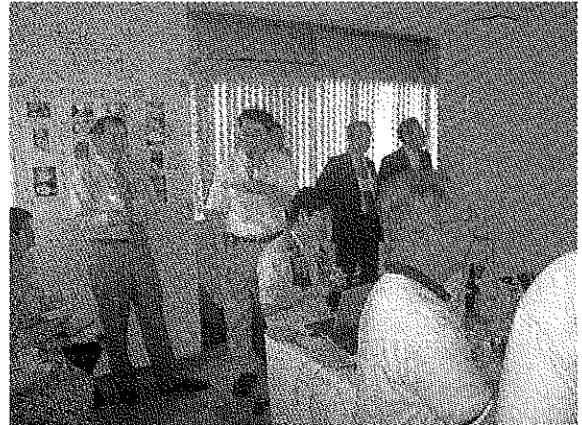
今年も、昨年の反省を踏まえて、参加者から先に持参品を受け取り、身軽な状態で、名前カードを記入して頂き、受付の流れがスムーズにいくよう工夫しました。おかげで混雑もそれほどなく、順調にパーティーが始まりました。会場である新事務所には開始時刻の6時前からたくさんの方が



かわいい絵が付いた“ひと味”もありました

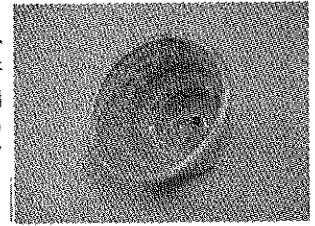
集まってみんなで持ち寄った“ひとこと・ひと味”をつまみに、参加者同士の輪があちらこちらできていました。私は初めてのよかネットパーティーでしたが、今まで参加したパーティーとは異なり、皆が人との交流に対して積極的だったことが印象的でした。西日本新聞の佐藤弘さんによる「食と暮らし」についてのお話や、伊藤の博多にわか、成金まんじゅう（直径30cm余）の入刀、糸乗が手打ち蕎麦を振る舞うなど、旨い食べ物とお酒に、一芸が加わり、会場は熱気に包まれていました。話しのネタとして各テーブルに、“飲み干さなければ置くことのできない杯”「そらきゅう」（底には穴が空いているもの）を置いていたところ、皆さん珍しがって手に取り、実際に指で穴をふさいで酒を注ぎ、クツッと飲んだり、相手に注いで飲ませたり、パーティーが終わる頃には酔っぱらって上機嫌になっている方がたくさんいました。

2日にわたる開催でしたが、1日目（金曜日の夕方）は約90名の参加者（全体の7割）の方が集中して来られたため、裏方もばたばたで、息つく間もなく会場をぐるぐると駆け回って、気がついたら博多一本締めでパーティーが終わっていました。一方2日目（土曜日の午後）は、約40名の方が足を運んでくださいました。出席者は前日の半分以下だったので、人でごったがえした前日とは異なり、おちついたパーティーになりました。テーブルに並べられた料理も余裕があり、来てくださった方もゆっくり味わっているように感じました。途中、前日に引き続き博多にわかや、ゲームを行い、前日と比べ人数が少なかったため、ほとんどの参加者が輪になって、みんな一緒になって楽しむ時間などがあり、ほのぼのとしたパーティーになりました。



佐藤弘さんによる「食と暮らし」についてのお話

話しのネタとして各テーブルに置かれた、飲み干さなければ置くことのできない杯「そらきゅう」。底には穴が空いている。



●いい汗かきました！

私は、飲食店でのアルバイトを長くやってきましたし、毎月のように、手作りでイベントの企画・運営をやっていたので、この目をとても楽しみにしていました。裏方の仕事をやりつつも、お客さんと話をしたり、人を紹介したり、一緒に飲んで楽しんだり、と自分もお客さんと一緒にわいわい楽しみ、そして輪を広めるというやり方でパーティーをやってきたので、よかネットパーティーでも、きっといろんな人との出会いがあるのだろうなど、思っていました。ところが実際には、皿の片づけや料理の準備などの裏方の仕事が気になって、交流するどころではなく、どたばたと走りまわっているうちにパーティーは終わってしま



博多にわかにつけて、直径30cm余の成金まんじゅうに入刀



テーブルを囲み、皆で持ち寄ったご馳走を堪能

た。裏方として走りまわり、自分の交流、ひともうけの時間はなかなかとれないパーティーでしたが、出席者が喜んで帰って行く姿をみて、久々にいい汗かいたなあと思いました。

(ゆきまる ひさのり)

●もうかった気分になれた2日間

今回は初めての2日間にわたる開催、会場も新事務所ということで、先輩所員の方々にとってもいつもと少し勝手の違うパーティーだったようです。私にとってよかネットパーティーは、初めてづくしの2日間でした。私は今回「写真係」だったのですが、先輩所員の話から、パーティーの写真が次号よかネットの表紙になるということを知っていたので、皆さんの交流の様子をパシャパシャと写真を撮っていました。テーブルには関西の栞餅や鮎寿司、北海道の鮭など日本各地の味が並んでいましたが、やはりここは九州ということで、九州の味が多かったようです。にもかかわらず、目にする料理も酒もほとんどが初めてみる一品でした。パーティーに出たお酒は、私が一度も飲んだことのないものばかりでした。

もともと私は食意地がはっている方なのですが金曜日はバタバタしていたので、うまそうな酒や料理を横目でチラリと見、味を想像しながらぐつと我慢の日でした。一方、土曜日は若干余裕があったので、佐賀県鹿島の日本酒や焼酎、沖縄料理などを少々食べることが出来ました。するとこれが実に美味しく、特に日本酒は（これまで私は日本酒をほとんど飲んだことがなかったのですが）これからは飲まないで損だな、と思わされる味でした。

パーティーに参加された方々は、私にとってはほとんどが初対面の方でした。よかネットパー

ティーのように、普段はなかなか接点のない人たちが集まって出会い、それぞれが持ち寄りあった品を味わうというのはなかなか機会の少ないことですし、普段聞けないお話や、味を知り、もうかった気分になれた二日間でした。（はら けいすけ）

●パーティー後の反省会

よかネットパーティーを無事に終えて、月曜日の朝会では所員からは次のような意見がでていました。

- ・料理の準備・片づけなどで、なかなか交流する時間がなかった。交流の輪に混ざりたかった。
- ・美味しそうな料理が食べられなくてとても残念。
- ・2日パーティーをやるのは、思ってた以上にたいへんだった。
- ・今年から最初に、持参品を預かるようにしたところ、今までより受付がスムーズにいくようになった。
- ・手荷物を置くスペースを設けたものの、荷物があちこちに散乱していた。次回は何かしらの工夫が必要だ。
- ・パーティーが終わってからの片づけが思うようにはかどらなかった。
- ・早く来られた方に対しても、何かしらのもてなしをするべきだ。
- ・金曜日の方がお客が圧倒的に多く、ニーズがあることがわかった。
- ・博多にわかには、意外と期待されているようだ。
- ・パーティーに参加できなくても、ひと味だけでも、自慢の一品を送ってくる「心の参加者」が多くいたので感謝したい。

来年のパーティーをどんなふうに行うか、みなさんの意見も聞きながら、人もうけのパーティーを今後も続けたいと思っています。（所員一同）

史跡・遺跡系に対する認知度、  
体験度が低かった

～「九州度の自己採点」を集計してみました～

糸乗 貞喜

世界のどんな国に行っても、日本のどんな地方に行っても、観光の定番というものは“史跡・遺跡”、“たべもの”、“市場や土産物店”となっている。なぜそうなっているのか。おそらく人間というものは、「人間がどうして生きてきたのか、

どうして暮らしているのか」に、一番興味をもっているからではないだろうか。

景色は確かにすばらしいが、四季の変化はあるとしても、それほど変わるものではない。一方、史・遺跡は、切り口や立場を変えてみると、全く違った顔つきを見せる。ということは、レポートの要素としては、史・遺跡系の方が強いのではないかと。

そんな潜在意識があったのか、70の項目を選ぶときには、県別の人口比ぐらいしか考えなかったのに、史・遺跡系が三分の一強、たべもの・土産物・行事系が三分の一強、その他となっていた。

皆さんの九州度を集計してみて、一番感じたのは「歴史」の評価が低いということだった。ひよっとすると、九州の観光がもう一つ強くならない原因は、ここにあるのではないかと思った次第である。

ずっと以前に、南河内の羽曳野市で仕事をしていたときに、「この地の“河内飛鳥＝かわちあすか”という史跡は、奈良の飛鳥よりも古く、規模も大きいぐらいだからもっと前面に出したらどうですか」と言ったら、「うーん、だけど大和の飛鳥は史跡やけど、こっちは遺跡やからなあ」と言った人がいた。つまり、「史料にでてこないでお話になりにくい」という意味ではあるが、どちらかというところ、河内というイメージを避けている雰囲気であった。

その河内飛鳥を応援する意味で、“世界的巨大古墳(応神・仁徳御陵)を空から見る会」といって、セスナに分乗して楽しんだりした。ところが、今では史跡と遺跡が、どんどん重なり合っていくし、地域の人たちも“河内飛鳥”が自慢の種になってきている。

史跡・遺跡はありがたいもので、いくらたっても古くさくなくなることはない。新たな建設投資も要らない。建築物の場合は維持費はかかるが、かけがえのない建物を、先人が建てておいてくれたと思えば安いものである。構築物の場合は、たとえば岩戸山古墳の石人にもたれかかっても、石馬に跨っても、真にいい気分になれるが痛むこと

九州度集計結果

系	知らない	知っている	食べた、 現地で見た、 会ったことがある	
史・遺	1.水城跡	19 16.0%	53 44.5%	47 39.5%
史・遺	2.宗像大社沖津宮	29 24.4%	82 68.9%	8 6.7%
史・遺	3.宗像大社高宮	44 37.0%	39 31.9%	37 31.1%
史・遺	4.若戸山古墳	69 57.1%	27 22.7%	24 20.2%
史・遺	5.八女郡屋	61 76.5%	22 18.5%	6 5.0%
史・遺	6.宮地蔵神社奥の宮	84 53.6%	32 26.8%	23 19.3%
史・遺	8.精舎三連水車	27 22.7%	35 29.4%	57 47.9%
史・遺	9.茨原山	20 16.8%	48 40.7%	50 42.4%
史・遺	10.竹原古墳	88 74.6%	18 15.2%	12 10.2%
史・遺	19.名護屋城跡	19 16.0%	40 33.8%	60 50.4%
史・遺	20.吉野の星遺跡	3 2.5%	43 36.1%	73 61.3%
史・遺	24.松浦水軍	17 14.3%	89 74.8%	13 10.9%
史・遺	28.草履島	12 10.1%	90 75.6%	17 14.3%
史・遺	35.チブサン古墳	80 75.6%	18 16.0%	10 8.4%
史・遺	38.通潤橋	26 21.8%	43 36.1%	50 42.0%
史・遺	44.宇佐八幡宮	19 15.7%	35 29.9%	67 55.4%
史・遺	45.熊野産座仏	51 41.8%	36 29.5%	35 28.7%
史・遺	46.白杵石仏	19 15.6%	44 38.1%	59 48.4%
史・遺	46.青の河門	17 13.9%	42 34.4%	63 51.6%
史・遺	54.鶴宮屋敷	75 61.5%	24 19.7%	23 18.9%
史・遺	55.権葉の焼酎	48 39.3%	60 49.2%	14 11.5%
史・遺	57.新しき村	63 51.6%	59 49.9%	3 2.5%
史・遺	61.知縣特攻平和会館	16 13.1%	58 47.5%	48 39.3%
史・遺	66.西郷社	49 40.2%	68 54.1%	7 5.7%
史・遺	47.日水ダム	82 75.4%	22 18.0%	8 6.6%
史跡・遺跡系	1,069 89.5%	1,122 97.4%	914 77.1%	
行事	7.嘉徳御膳	28 21.6%	61 51.3%	32 26.9%
行事	11.博多祇園山笠	4 3.4%	38 32.8%	78 63.9%
行事	33.御九日(長崎くんち)	9 7.6%	77 64.7%	33 27.1%
行事	34.八千代座	51 42.9%	45 37.8%	23 19.3%
行事	60.高千穂の夜神楽	26 21.3%	67 54.9%	29 23.8%
行事系	116 19.4%	289 48.3%	193 32.3%	
物産	14.蒲明茶舗	32 26.9%	13 10.9%	74 62.2%
物産	15.成金銀頭	51 43.2%	17 14.4%	50 42.4%
物産	23.小城羊羹	29 24.4%	15 12.6%	75 63.0%
物産	38.焼白楠	38 30.3%	16 13.4%	67 56.3%
物産	58.百年の風鈴	29 23.8%	28 23.3%	67 54.9%
物産	28.有田焼	9 9.0%	25 21.0%	84 70.0%
物産	42.小島田	64 52.8%	21 17.4%	36 29.9%
物産	62.法寿官	62 50.8%	49 40.2%	11 9.0%
物産	63.もちぎゅう	53 43.4%	39 32.0%	50 42.6%
物産	16.薩摩切り	16 13.1%	41 33.6%	65 53.3%
物産	17.久留米餅	23 19.3%	50 42.0%	48 39.7%
物産	18.藍胎漆器	49 41.2%	30 25.2%	40 33.6%
物産系	444 36.8%	342 28.7%	855 70.5%	
食	12.とんかつラーメン登え玉	5 4.2%	16 13.4%	88 73.4%
食	13.ごぼ天うどん	24 20.3%	11 9.3%	83 70.3%
食	30.卓袱(しっぽ)料理	10 8.4%	42 35.3%	67 56.3%
食	31.ウナギの蒲焼(きり)“ひら”	87 73.1%	11 9.2%	21 17.6%
食	32.長崎ちゃんぽん	0 0.0%	3 4.2%	114 95.8%
食	39.高菜飯	17 14.0%	6 5.0%	96 81.0%
食	49.だごじる	25 20.5%	16 13.1%	81 66.4%
食	50.開アノ開サバ	5 4.1%	24 19.7%	93 76.2%
食	59.ひやじり	49 40.2%	34 27.9%	39 32.0%
食	68.程島大根	1 0.8%	59 47.9%	62 51.2%
食べ物系	223 18.6%	223 18.6%	756 62.9%	
自然	21.有明海の干潟	1 0.8%	53 44.5%	65 54.6%
自然	22.ムツゴロウ	1 0.8%	47 39.5%	71 59.7%
自然	27.九十九島	10 8.4%	48 41.2%	60 50.4%
自然	28.対馬	3 2.5%	74 62.2%	42 35.3%
自然	29.岩崎	7 5.9%	59 49.6%	53 44.5%
自然	37.阿蘇山	0 0.0%	13 10.9%	106 89.1%
自然	51.やまなみレイウェイ	3 2.5%	20 16.4%	98 81.1%
自然	58.熊鷹樹林	47 38.5%	41 33.6%	34 27.9%
自然	64.開闢岳	8 7.4%	55 45.1%	58 47.5%
自然	65.屋久島の縄文杉	5 4.1%	98 80.3%	19 15.6%
自然系	88 7.2%	509 42.3%	607 50.5%	
他	52.八丁原地熱発電所	48 39.3%	31 25.4%	43 35.2%
他	16.武田鉄矢	0 0.0%	96 80.7%	23 19.3%
他	40.黒川温泉	15 12.4%	39 32.2%	67 55.4%
他	41.八代聖紀	1 0.8%	111 91.7%	9 7.4%
他	42.水前寺清子	2 1.7%	105 86.8%	14 11.6%
他	53.双葉山	13 10.7%	102 83.6%	7 5.7%
他	69.種子島宇宙センター	2 1.6%	104 85.2%	16 13.1%
他	70.砂蒸(温泉(留宿))	4 3.3%	85 70.7%	52 43.0%
その他	85 8.8%	653 67.4%	231 23.8%	

はない。太宰府の都府楼あとの礎石の上に立って、いにしへの佇まいを思い浮かべるといような、贅沢をやっても壊れることはない。

問題は、想像力をかき立てる“知的サービス”が必要なことである。

九州には京都・奈良に匹敵する史・遺跡がある。少し集積度が低く散らばっているという点では、不利な面はある。それは工夫しなければならないが、九州内部で“ヨイショ”しあって知名度を上げるとリピートが増えるに違いない。来訪者が増えれば、“たべもの”や“土産物”の売り上げも増え、観光産業の基礎消費が拡大し、商売人の経営も安定し、雇用も増加するに違いない。

今でも、回答がFAXで届くので120通ぐらい集計している。

お叱りの言葉も、お褒めの言葉も頂いたが、「オススメ九州」の三分の一ぐらいでも挙げておきたい。

○史・遺跡系＝キリシタン関連を入れよ、炭坑・ボタ山・炭住がないぞ、宇佐神宮、岡城(大分県)、金印の志賀島、元寇防塁、太宰府都府楼跡、鴻臚館(以上福岡県)、筑後川の昇開橋、祐徳稲荷(以上佐賀県)

○行事系＝山鹿燈籠(熊本県)、唐津くんち(佐賀県)、世界最大規模の大分車椅子マラソン

○物産系＝城下鯨(大分)、明太子、鹿児島福山町の黒酢

○食べ物系＝折尾のかしわ弁当、久留米ラーメン(福岡県)、熊本のいきなり団子、鹿児島串木野のさつま揚げ

○自然系＝幸島のサル(宮崎県)、関門海峡、柳川下り(福岡県)、虹ノ松原(佐賀県唐津)

○その他＝北原白秋、滝廉太郎、シニカルで意表をついた三大不良資産(シーガイア、ハウステンボス、ダイエー福岡事業)

というのがありました。恐れ入りました。

(追記)「沖縄は、はいらないのかよ」とも言われた。リストアップしているときには考えたが、やっぱり別の方がよいと思ったので一緒にしていない。(いとりのり さだよし)

屋形船で食べるエツは五つの“あじわい”があるからこそ価値があり、楽しい

山田 龍雄

10年近く前、大川市出身の所員の企画により、初めて“エツ”なる魚を屋形船で食べた。この時には、新鮮ではなかったのか、口の中でモサモサした感じがあって、期待していたほど美味しくなく、少しがっかりした思い出がある。

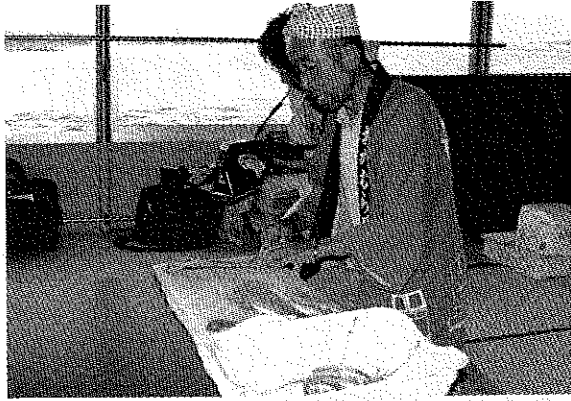
そして、今年の4月10日(「よかネット5月号」掲載)に、筑後川遊覧を行い、船長兼料理人の岡村さんとお会いしたことが、印象の良くなったエツを再度食べるきっかけとなった。

4月末のあるパーティで、岡村さんとお会いする機会があり、10年前のエツの思い出を話すと、「それじゃ、私のエツ料理を食べてみなさい。他のところとは全然違う」と言われたことから始まり、エツの美味しい時期、エツの料理法等々、10～20分近くエツ講釈を拝聴することとなる。ここまで自慢されたら食べない訳にはいかなかった。ただし、岡村さんの条件としては「私がゆっくり料理し、相手できるのは平日しかできないので、平日に来て欲しい」とのことであった。そこで5月25日(火)の夕方に「本当に美味しいエツを食べる会」という企画を立てた。

船賃などを考えると、最低でも10名は集めなくてはいけないと思い、早速、お誘いの案内を作成し、来てくれそうな30数名にFAX勧誘をしたが、平日であることもあって、当日3日前になっても、どこからも返事はなく、今回の企画を断ろうと思っていた。すると、2日前になって外部から4名の参加が得られ、所員含めて9名となり、何とか



エツ料理の3品、煮付け、南蛮漬け、あらい



船頭から料理人になって、捕りたてのエツを捌いている岡村さん

決行することができた。

●10年前より楽しく、また美味しかった。

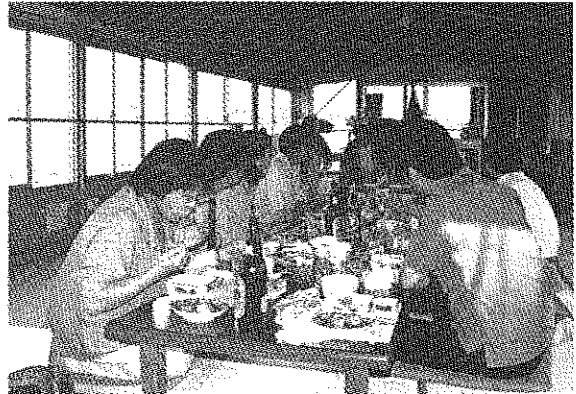
エツという魚はふしぎな魚で、通常は有明海奥部に生息しており、産卵に際し4月下旬ごろに筑後川河口付近に集まり、6～8月にかけて産卵する。産卵時には餌を食べず、河口付近の真水で脂もほどよく落ちるため、遡上してくる5～7月が最も美味しいエツが食べられるらしい。

当日は、西鉄柳川駅から、一路タクシーにて大川市の鐘ヶ江大橋近くにある乗船場まで走った。到着すると、既に船のなかにはテーブルが置かれ、9人分の膳が用意されていた。岡村さんは、エツを捕りに行って戻ってきていないので、「エツ骨のフライ」をつまみにしてビールを飲みながら待つこと30分ほどすると、岡村さんが20数匹のエツが入ったバケツを抱えて戻ってきた。

ここからが、本格的なエツ料理タイムとなった。

まず、岡村さんは目の前でエツを捌き、さらに小骨が多いエツを食べやすいように細切りにしてくれた。確かに10年前に食べたエツより歯ごたえもあり、うまかった。他にエツの生態を聞きながら、エツの白子、卵巣、胃袋などを食した。胃袋は小指の先ほどの大きさであったが、コリコリとした歯触りがあり、うまかった。また、前もって作っていたエツのあらい、煮付け、南蛮漬け、ホイル焼きの5品のエツづくしで十分満足した。

夕日が落ちそうになり始めたころ、岡村さんは「私は、好きなところに夕日を連れてくることができます。」と粹なことを言われ、ご自慢の夕日スポットに案内していただいた。このサービスは、現地でしか味わえないものであり、参加全員喜んでいたようだ。



岡村さんの講釈を聞きながらの宴会



昇開橋の下から見る夕日

最後は、岡村さん特性のタレを入れた「エツのお茶漬け」で締めとなった。このお茶漬けはタイミングも良く、コリコリした歯触りもあり、美味しかった。

●エツ体験5つの“あじわい”

今回、岡村さんのサービスしていただいた屋形船でのエツ料理体験は、現地でしか味わえないモノとサービスがあるからこそ、また、来てみようと思うのである。

- ①この時期にしか食べられないエツを舌と胃袋で満足する“あじわい”
- ②岡村さんのエツ捌きの巧みな技を見て、目で楽しむ“あじわい”
- ③エツの生態、筑後川の環境の話など聞き、知的刺激を受ける“あじわい”
- ④屋形船から外の風景や夕日などの風情を楽しむ“あじわい”
- ⑤屋形船という閉じた空間のなかで、参加者が一体感をもって団らんと交流で楽しむ“あじわい”

正直いって、脂ののった“いわし”や“サバ”の方が魚自体の味からすれば、エツより上だとは

思うが、屋形船で食するエツは、この時期しか食べられないといった季節感と多様な“あじわい”があるからこそ、名物になっているのであろう

今、レジャー観光は、単品のサービスではなく、今回のエツ料理体験のように五感で味わえる多様なサービスが、求められていると思う。

(やまだ たつお)

放置自転車を再利用し、  
まちづくりに活かす  
—市川市行徳地区の事例報告—

原 啓介

私は久留米大学の駄田井教授、藤田教授のもとで、共用自転車に関する勉強会に参加している。共用自転車とは、誰でも利用できる自転車やそのシステムのことである。

私は自宅から30分かけて自転車通勤をしている身であり、学生時代は自転車の遠乗りをしたり、競技会に参加したりしていた。私にとっての自転車は趣味の一つであり、生活の一部である。そんなこともあって、放置自転車や自転車運転マナーの問題などは、日頃から気になる話題であった。会社で勉強会があるという話を聞いたとき、「これは是非行きたい」と思い、参加させてもらっている。

その勉強会のなかで、他都市において共用自転車の取り組みを行っている団体を視察しようということになり、千葉県市川市行徳地区に伺った。今回はその報告をしたい。

●市川市は放置自転車天国だった

千葉県市川市行徳地区は、人口約15万人、東京のベッドタウンであり、通勤通学者による放置自転車問題に悩まされてきた。平成12年総務庁の統計によると、駅における一日の放置自転車台数で、行徳駅が全国ワースト2位、南行徳駅がワースト8位に入っていた。そのため駅前には、歩道を占拠する放置自転車のためにベビーカーが通れない、老人がバスに乗り遅れてしまうというような状況だったらしい。

市川市で共用自転車の取り組みを行っているのは「NPO法人青少年地域ネット21」である。この取り組みは、木曜NHK番組「ご近所の底力」（毎週木曜夜9時15分～）で紹介されていたり、



青少年地域ネット21の皆さん。左端が三宮さん

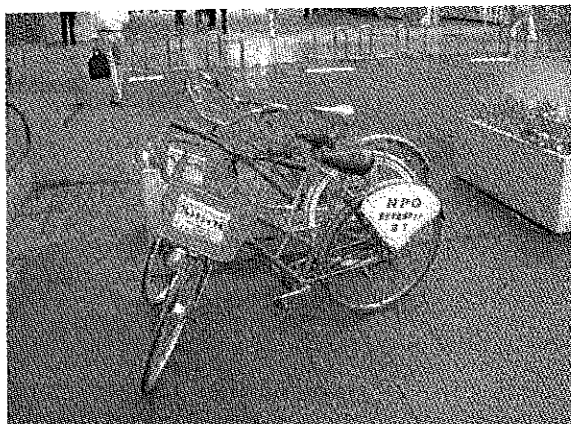
勉強会のなかでも度々話題に上がっていた。活動の概要は、

- ・共用自転車の名称はフレンドシップ号。現在青少年地域ネット21が保有する自転車台数は564台、そのうち264台がまちを走っている。
- ・青少年地域ネット21が、市川市から引取手のない放置自転車をもらい受けカゴを黄色にペイント、車体は小学生が創作ペイントを施す。またカゴ前面に色を塗った作者名、学校名を記載。
- ・フレンドシップ号は誰でも無料で乗れる共用自転車であり、鍵は取り付けない。
- ・平成14年4月に走行開始。地元中学生がチラシを配り、市民への周知を行った。
- ・最初の100台については自転車に企業広告を取り付け、ペンキ代、管理人件費などを捻出した。
- ・自転車返却場所は、市内40カ所の共用自転車置き場に設定。返却場所以外に置かれた自転車については青少年地域ネット21の職員が不定期に地区内を巡回し、回収。同職員が自転車整備も行う。

といったところである。

●活動を始めるきっかけは、放置自転車対策ではなかった

- お話を伺ったのは事務局長の三宮美道さんである。
- ・市川市行徳地区は人口15万人のうち、外国人が4,000人、毎年一万人が転出入をする地域であり、コミュニティーが形成されにくかった。そこで三宮さんは、青少年と地域とのつながりをつくることや、青少年の健全な育成を目的として、地域の夏祭りの開催や、子ども交流クラブの設立などの活動を始めた。
  - ・共用自転車をはじめたきっかけは三宮さんの指



行徳駅改札口付近の回収場所に集められたフレンドシップ号。

導する野球チームの中学生が、自転車を盗られたことであった。しかし、自転車を探してたどり着いたゴミ処理場で、年間14,000台もの放置自転車が破砕処理されているということを知った。共用自転車は放置自転車対策としての一面もあるが、それよりも自転車の盗難をなくすこと、青少年にもものを大切にすること、青少年にもものを大切にすること、青少年にもものを大切にすることを教えたいということを目指してスタートした。

・自転車のペイントは、市内10カ所の小学校が順番で担当する。小学校では「総合学習」の授業時間を使って行われ、どの学校でもPTAや保護者を交えた一大イベントとなっている。

#### ●フレンドシップ号は市川市民に浸透していると感じた

市川市でお話を聞いた方は、みなさんフレンドシップ号の活動を知っていたし、雨にも関わらず、実際にフレンドシップ号に乗っている人もちらほらと見かけた。青少年地域ネット21が行徳地区で行ったアンケート調査では、回答者の3割の方がフレンドシップ号を利用したことがあると答えている。「そこまで活動が浸透したのは、やはり子どもの力が大きい。」と三宮さんはおっしゃっていた。「活動開始当初は、自転車の整備や回収は2人のスタッフのみの手で行っていたが、最近は住民の方が、乗り捨てられたフレンドシップ号を自主的に回収スポットに戻してくれるので、だいぶ楽になった。子ども達が頑張っているから…とって手伝ってくれる方も多い。」ということであった。フレンドシップ号の魅力は、共用自転車の取り組みを放置自転車対策としてだけでなく、自転車を媒介とした子どもと大人の交流や、行政と市民を巻き込んだ地域ぐるみの活動に発展させ



色、形が様々なので、お気に入りの一台を見つけて乗るのも楽しいかもしれない。

ているところにあると思う。

自転車は車に比べて環境に優しく、安全、健康にも良い等、様々な利点を持った乗り物であり、私はまちづくりの仕事始めて時間がたたないが、自転車を活かしたまちづくりに取り組む自治体をいくつか知っている。私は単純に「自転車のまちづくり」という言葉を聞くと、自転車道や駐輪場の整備を連想してしまう。しかし、余分な投資をせずに、引き取り手のない放置自転車というゴミを再利用し、子どもから大人まで一緒になって地域を盛り上げる「自転車のまちづくり」もあるんだなと思った。

#### ●しかし、活動を継続するためにクリアすべき課題も多い

まず第一に活動資金をスポンサーからの広告料に頼る現状では、事業として継続した運営を行っていくには限界があるということである。これについて、三宮さんは共用自転車と地域通貨とを組み合わせた運営システムを模索しているとおっしゃっていたので、どういうことになるのか、注目している。第二に共用自転車の私有化である。共用自転車を行っているまちは、どこも、この問題を抱えているようである。私はフレンドシップ号においては、自転車のカゴにペイントした小学生の氏名が記載されている点など、市民のモラルに訴えかけるところも大きく、私有化は少ないのではないかと思っていたが、実際には自転車に鍵をかけるケースが後を絶たないらしい。フレンドシップ号は自転車回収場所を設定しているが、実態は「乗り捨て自由」であるため、ルールに則って利用されるためには利用者の善意に頼るところが大きいと思われる。地道に活動目的をPRし、私

有化禁止を訴えかけていくしかないのかと感じてしまった。

利便性は高いが管理しにくい「乗り捨て自由方式」を取るか、利便性は低いが管理のしやすい「レンタルサイクル方式」を取るかというのが難しい点であると思う。(はら けいすけ)

国東半島で寺めぐり

本田 正明

前号のよかネットで行った「九州度テスト」(この号に集計が出ている)にも挙がっている熊野磨崖仏がある国東半島には、以前から行ってみたいと思っていた。ガイドブックなどをみていると、六郷満山と呼ばれる国東仏教文化が栄え、平安末期には65寺800余の院坊があったそうである。“秘境”や“山岳寺院”などと書いてあるので、てっきり高野山のように山奥にある宗教都市だと思っていた。

●国東半島は陸の孤島

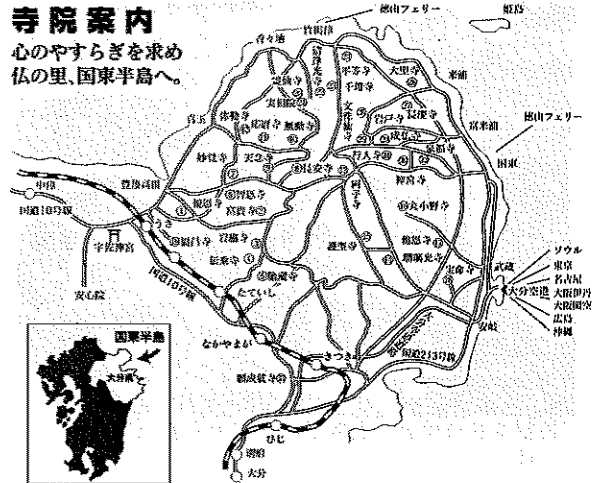
実際に行ってみると、半島中央部に両子山(721m)、文殊山(617m)などの山があるものの、その周囲は同心円上に緩やかな斜面が広がる田園地帯であり、秘境というにはあまりにもものどかな風景が広がっていた。こんなところにこそ田園居住したいなと思いつつながら、お寺を散策していると、バス停を見つけた。ふと見つけたバス停には、平日・土日とも便数が一便しかなかった。地図で最寄りの駅を確かめてみると、最寄りの鉄道駅までは1時間ぐらいかかりそうな距離である。また、コンビニなどの便利施設もまったくない。私は都会とのつながりがなくては生活できない人間なので、ここにはやはり住めないかも、と思い直した。

●宇佐神宮が影響を及ぼした六郷満山

国東半島は高野山のように、金剛峰寺を総本山して都市が形成されているのではなく、それぞれ独立した寺院が直径30~35kmの半島の中に点在している。日本地誌や角川日本地名辞典をみると、神仏習合が早くから行われた宇佐八幡の神宮寺(宇佐弥勒寺)の僧が、山岳修行を始め、各地に霊場を開いたということが書いてある。また1285年ごろの荘園分布では、豊後国の7

寺院案内

心のやすらぎを求め 仏の里、国東半島へ。



国東半島は寺院の宝庫



宇佐宮弥勒寺の講堂跡のものと思われる礎石

708余町(1町はほぼ1haに相当)の約3分の1にあたる2,692町を宇佐八幡領と宇佐弥勒寺領が占めており、大きな勢力を持っていた。国東半島に行く前に宇佐神宮にもよったのだが、下宮付近に宇佐弥勒寺の金堂や講堂、東塔などの礎石が、森の中にぽつぽつと規則的にならんでいた。その石の数の多さからも大きな建物があつたのだろうと想像が膨らみ、楽しくなった。ただ、礎石のそばには説明書きがある程度で、ほとんど紹介されていないようであり、見に来ている人はほとんどいない。六郷満山とのつながりなど、歴史的なつながり、物語をテーマにしたら、魅力的になりそうなのにと、少し残念な思いがした。

●ゴールデンウィークは里帰りシーズン

今回の寺めぐりをする上で、実は私が一番楽しみにしていたのは、どこかのお寺で精進料理や写経などを体験することだった。しかし、ゴールデンウィーク中なので予約でいっぱいかも



昔は子どもの遊び場とされていたという富貴寺大堂

しれないと思い、2カ所ほど電話をしてみたのだが、「あいにく今は法事が多くて住職が手を離せないんです。」「この時期は人数を確保できないので、精進料理は難しいねえ。」と思ってもみない返事が返ってきた。いろいろ聞いていると、ゴールデンウィークは、都市に出ていった子供たちが里帰りをするので、家族がそろそろ数少ない機会のようなのである。そのため、ここぞとばかりに法事や農作業の手伝いが組まれているみたいである。

#### ●国東半島はまるごと仏教文化の博物館

国東半島は観光地だとばかり思っていたのだが、なんらふつうの田舎と変わることはなかった。お寺をめぐるだけでも、駐車場に困ることはなく、観光客といっても年輩の夫婦がちらほらいる程度である。九州でもっとも古い木造建築物で国宝になっている富貴寺大堂や、弥陀、不動、大威徳明王など9体の仏像がある真木大堂も、訪れたのが夕方4時だったせいもあるが、誰もいない状況だった。ただ、熊野磨崖仏だけは、40人乗りの大型バスが3台停まっており、自家用車も40台以上あるなど、多くの人が訪れていた。たしかに約7～8mもある不動明王像や大日如来像の迫力は圧巻だが、真木大堂なども見劣りしないぐらいの魅力がある。他にも宇佐神宮が所有していた荘園である田染荘が、平安・鎌倉時代の風景のまま残っていたり、大友宗麟の時代に本末寺院仏閣並びに寺領千石共没収され、廃寺となった六郷満山の中核寺院の旧千燈寺跡もあり、国東半島がまるごと仏教文化の博物館といってもいいぐらいである。

熊野磨崖仏や宇佐神宮に訪れている多くの人



顔の大きさが人間の背丈ほどある熊野磨崖仏  
(右隅に人が写っている)

がついでに訪れてみたくなるようなしかけをつくれれば、一日ではとても見て回れないぐらいのポイントがあるので、宿坊や民宿などもニーズになってくるのではないかと思った。

(ほんだ まさあき)

### 所員近況

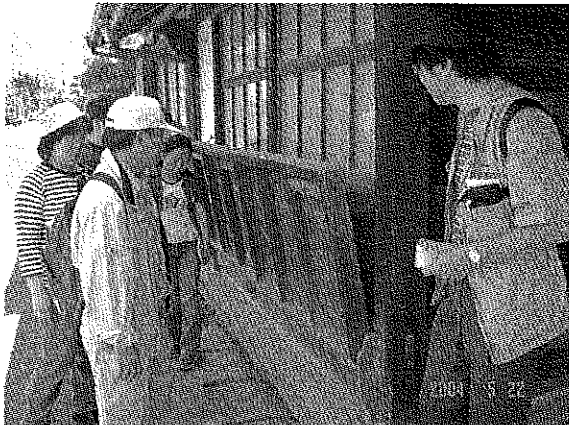
#### 園唐津街道ウォーキング

##### 畦町～原町～赤間宿

福岡には長崎街道をはじめいくつかの旧街道が通っているが、宗像市から隣の福岡町にかけては唐津街道があった。全国の古道を歩いている旧街道ウォークというグループがあり、以前にも香椎方面など唐津街道の一部を歩いたことがあったが、今回は福岡町の畦町(あぜまち)宿から宗像市の赤間宿までを歩く企画となり、私も参加してみた。

出発点となった畦町宿は、1642年に唐津街道が整備された際、青柳宿(現古賀市)と赤間宿(現宗像市)の間が遠いということで周辺の村を集めて宿駅としたのが始まりだそう。今は多くの家が建て替えられてしまったが、街並みの雰囲気は一応あるし、古い建物もいくつか残っている。卯建(うだつ)がある家もあるので、かつては家の軒が並んでいたのだろう。中には、通りに面してはね上げ式の縁台が残っていて、多分そこは見世になっていたのではないかと思われる家もあった。

畦町宿を過ぎたあたりに太閤水という井戸がある。秀吉が九州征伐に来た際に、飲んだわき水がおいしくその名が付いたそうだが、実は福岡とその周辺に6ヶ所も「太閤水」というのがあるらし



はね上げ式の縁台（畦町宿）

い。

宗像市に入ると原町という集落があり、ここはそれなりの街並みの雰囲気がある。住民にも意識されているのか、各家の玄関先には「唐津街道・原町」と記された同じデザインの木製の灯籠が置かれてある。生け垣や土塀の街並みの中で、ハンギングバスケットなどガーデニングの技術を使いながら和風に見せている家もあった。ある建物は、古い家屋を利用した和風レストランかな、と思っ

てのぞいてみると肉屋さんだった。  
途中、国道3号バイパスを横切ったり、大きな住宅団地の中を通ったりして、やや旧街道の面影が感じられない部分があった。住宅地の中で、昼食にたまたま通りがかりで地鶏料理屋に入ったところ、古い民家を移築した店舗で、参加者にも受

けが良かった。

宗像には郷土料理として「鶏すき（すき焼きの肉が鶏）」があると以前から聞いていたのだが、鶏料理を食べさせてくれる店がなく探していたのだった。その店には鶏すきはなかったので、地鶏のたたきなどを食べた。

住宅団地を抜けると赤間宿がある。唐津街道の中でもこの付近で最も街並みが残っている所だろう。そうはいっても建物の単体としては割合あるものの、連なりとして残っているのはわずかになっている。

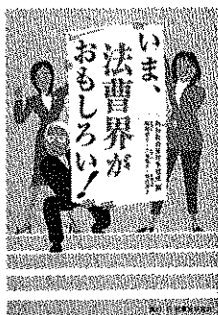
出光興産創始者の出光佐三氏の生家もこの並びにある。酒造など昔のまま営業している店も残っており、アイスクリーム問屋は古い建物のまま営業していた。店の中は駄菓子を中心に置いているが、その日は暑かったのでみんなでアイスを買った。大の大人全員がアイスを食べながら歩いていると、地元の人から「これはアイスを食べるグループか？」と聞かれた。

今回歩いてみると、街並みも結構楽しめるくらいは残っているな、というのが感想だが、観光の材料という視点でみるとインパクトはもう少しというところだろうか。地域の観光のメインにはなれないかも知れないけれど、彩り、味付けとしては面白い部分になるだろう。

（いとう さとし）

『今、法曹界が  
おもしろい!』

坂和総合法律事務所編、  
民事法研究会編



●「編」な本なので、気楽に読めます

「坂和さんの本は勉強になるけど（面白いけど）、結構しんどい」と思っておられる人は多いと思う。実は私もそうだ。ところが今度の本は、「編」な本なのだ。つまり、坂和さんの一方的な「喰りごと」だけにつき合わされることはなく、坂和弁護士事務所の女性の「つぶやき」や「ヒソヒソ」も入っている。それは吉岡寛子弁護士と嶋津淳子事務局長である。ということは、「弁護士

ってどんな商売や」とか「日頃何をしてるのか」、「どんな客が来るのか」、「裁判でどんなやり方」と思っている人にも面白い。

残念ながら「儲かるのか」という話はないようだ。

●どこから読んでも、十分面白い

まずこの本を手にした方は、「司法試験って、どうして受かったの」に興味があり、そこを讀んでみようと思うだろう。実は私もそうだったが、途中でバス停に着きストップした。次に開いたところには「起案とは」が出ていた。

「起案」の話も面白いので、私の商売（計画屋）と比べながら読み始める。私たちの商売は、「このプランならみんなが幸せになりますよ」と、過去・現在の材料を並べて実証し未来にわたって説得しなければならないわけで、「似ているなあ」とも思った。それも途中までで、次に開くと

美人弁護士のところが出てきた。こんな不埒な読み方をしながら、ちょっと落ち着いたときに、それぞれの続きを読む。

●図書紹介が書きやすい本でもある

というわけで、あちこちつまみ食いをしながら、この紹介を書いている。紹介文を書くのが嫌になるのは、「読んでしまわねばならん」と思うからだが、この本は書きやすい。正直なところ、まだ読み終わってはいない。

今までの本は、寝転がって読むのに都合がよかった（よく眠れた）が、この本はそれには向かないかも知れない。続けて読んでしまうかも知れないから。重さも、値段も手頃だから、気楽に、どこでもお読みください。

(糸乗 貞喜)

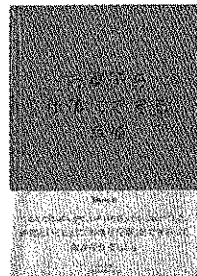
『就職がこわい』

香山リカ



『お菓子を仕事にできる幸福』

tohato編



●「就職がこわい。」4年前私もそう思った

『就職がこわい』。本屋さんの1階でこの本を目にした時、「就職についてどうしていいかわからず」立ち止まっていた4年前の自分を思い出した。将来に向かって高校・大学に進学し、その将来が目前に来た時、何がしたいのか考えて好きに面接を受けにいけばよいのだと言われても、友人達のようにすんなりと就職活動にのめり込めなかった。「まちや人に関われる仕事に」と思うが、それに固執しすぎて、受けたいと思う会社がなかなかない。そんな視野の狭いことではだめだと自分に言い聞かせても、その気持ちをうまく取り繕って面接を受けることが難しかった。結果的には「まちや人に関わる仕事」に固執したことで今の

会社に入社することができたのだが・・・。

●外的要因もあることながら、本人の心の問題

この本は、精神科医としてまた、大学教授として日々学生に向き合っている著者が感じた若者の心の問題について書いてある。途中、話の展開で、一つひとつの言動をあまりにもマイナスに捉えているのでは？と思う部分もあった。しかし、就職活動の若者の気持ちは、4年前の私がそうであったように、わかる。

経済状況の悪化という外的な要因が生じたために、「就職率の低下」が目に見える数字となって現れているが、それを前提としても、問題は若者の自己への不安、不全感という自身の内面的な不安にある。

「どうせ自分なんて」と自分に見切りをつけているのに、「そんな自分だからどんなこともやります」とは思えず、「特別な自分」にしかできない仕事を待ち続けている矛盾した心理。とにかく観念的に「仕事とは何か」「自分にとって働くことは何か」とむずかしく考えすぎて、なかなか具体的な就職活動に至ることができない。

また、その親たちも自分達が亡くなった後のことを考えずに「好きにしていよ」とニコニコしている。

●解決策は、一人ひとりに“小ネタ仕事”で大丈夫よと伝える。

著者は解決策として、職業や仕事に「自分らしさ」を求めるのは、理想であるがかなり難しく、それよりも日々の小さなこと（小ネタ）に新鮮な驚きや納得を得ながら暮らしていくこと、「小ネタ仕事でも大丈夫よ」と一人ひとりに伝えていく事が大事だと述べている。「自分らしく生きること」を実現する以前に、他人をあてにしない人生を送る手だてさえみつければ、不安や恐怖の多くは消えるはずだと。

●数日後、さらに本屋の1階で発見。「お菓子を仕事にできる幸福」

装丁に惹かれて手にとった『お菓子を仕事にできる幸福』という本は、元々2003年3月に民事再生法を申請した榎東ハトが2003年5月に新制榎東ハトと新組織になり、「社員が自分で考え判断する」体制づくりを進めるなかで、社員が共有できる価値観を1冊の飛び出す絵本にまとめたものだ。印象的だったのは「『仕事とはたくさんのしあわ

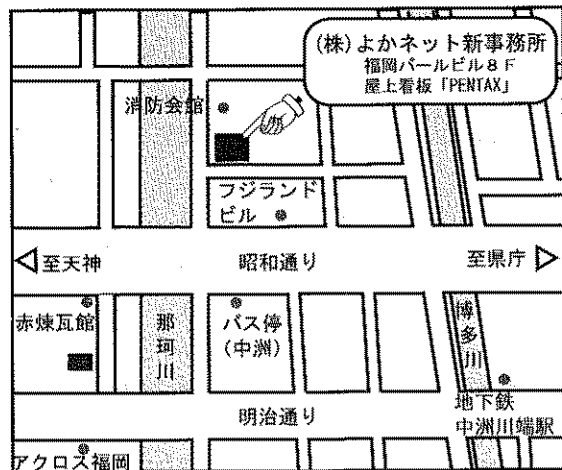
せ』の集合である」ということ。そしてCBO (ブランド管理統括責任者)であるプロサッカー選手中田英寿氏の「個人個人がプロであろうと努力することの大切さ。そしてそんな個人が集まって、チームとして結束したときの強さ。迷ったときにきちんとしたシンプルな答え、自分なりの『ルールブック』があればどんなときにも安心してチャレンジできる」という言葉だった。

●私にとって仕事とは

石の上にも3年というが、その3年が過ぎ、改めて「自分にとって仕事とは何だろう」と考えていた時、本屋で目にとまった2冊の本。考えたところで明確な答えが出るわけでもない。ただ、これらの本を読んで、日々の生活の中で自分がどんな風を感じ、周囲はどうだったかということを意識して丁寧に暮らしていくことからみえてくるかもしれないと思った。(愛甲 美帆)

●事務所移転を移転しました

6月21日(月)より、新事務所の住所、連絡先、地図は下記のようにしております。移転に伴い電話・FAX番号が変わりましたので、連絡の際はご注意ください。



[住所]

〒810-0802  
福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階

[連絡先]

TEL 092-283-2121  
FAX 092-283-2128

近くに来られた際は、是非お立ち寄り下さい。

編集後記

■6月中旬に事務所の引越を行いました。事務所の引越は、私にとっては初めての経験です。私は、新事務所のレイアウトや荷物の配置決めの担当になりました。同時に初のよかネット(本誌)編集という重要な役がまわってきました。前もって所員に原稿を書いて貰い、それらを割り付けて一冊にするのですが、引越の片づけもあり、なかなか所員の原稿があがらず、さらに、パソコンも途中一日間使えなくなることもあり、焦りました。はじめて経験することが重なって、はじめはどうなることかと不安でしたが、無事、引越も本誌の編集もやり遂げることができました。(ゆ)

よかネット No. 70 2004. 7

(編集・発行)  
株式会社よかネット  
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階  
TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128  
http://www.yokanet.com  
mail:info@yokanet.com  
(ネットワーク会社)  
㈱地域計画建築研究所  
本社 京都事務所 TEL 075-221-5132  
大阪事務所 TEL 06-6942-5732  
東京事務所 TEL 042-501-5231  
名古屋事務所 TEL 052-265-2401  
㈱地域計画・名古屋